

【2011 東北・関東大震災被災地報告①青森県の状況】**〈はじめに 一この震災の規模と意義一〉**

最初の活動場所は青森県八戸市。“比較的”被害が小さいとされているこの地域でも、震度 2~4 程度の余震が毎日何回も起こっていた。

被害の実態が把握しきれていない段階での想像にすぎないかもしれないが、2007 年の新潟県中越沖地震の被害と比較すると、一般に報道されている地域の被害が 1000 倍以上になる。そして現実には新潟県中越沖地震と同等から 100 倍の被害が出ている地域が多数存在し、これらは被害が“比較的”軽微とはいえ放置していいほど軽微ではないことは想像だけでも十分理解できる。これほどの被害が“比較的”軽微という印象になってしまうほど、今回の大震災は現代社会の危機管理のキャパシティを遥かに越えている。119 番や 110 番に通報量過多のため電話が繋がらなかったという被災直後の現実がそれを物語る。

今回の大震災の意義を考える上でのポイントは、国家の公共サービス能力の限界を越えた問題が発生した時に社会が何をしてくれるのか、他人が何をしてくれるのか、自分に何ができるのか、その全てが試されているということ。いつどこに来るかもわからない災害の当事者に自分になった時、自分の生活水準はどういうことになるのか、危機管理システムとしての自治体の対応がどのように機能するのか、そして個人的な助け合いにどの程度頼ることができるのかを、自分の頭と体で理解する機会となる。震災が起こってからこれまで様々な地域の方の話しを聞く機会があった。最も印象的なのは、これまで話した被災者が例外なく同じ言葉を口にしてきたこと。

「自分よりも大変な人たちがいる、そちらを優先して助けてほしい。」
このような言葉を口にする人たちが暮らす社会に生まれたことを誇りに思うし、
このような言葉を口にする人たちが本当に幸せになれる社会であってほしい。

<比較的軽微？ 一八戸の被害状況一>

3月11日の緊急ニュースでも被災映像が全国的に報道されていた港のある青森県八戸市では最大6m以上の津波が観測され、死者1名重軽傷者27名、全壊の建物100棟という被害が出ている。20日の夜になっても、その日の午後から5時間以上余震が来なかったことがこの街では大きな「グッドニュース」として会話が盛り上がっていた。八戸での滞在は約1週間。海岸地域を自転車でまわり、被害状況を自分の目で確かめた。



まず何億円もする大型船が数隻乗りあがって横転していた。小型船も含めほとんどの漁船が流され、多くの漁業関係者が職を失った。海岸線周辺の民家の前には使えなくなった電化製品や泥まみれになった家具、元の形のわからない瓦礫が整理しておかれていた。どの種類のごみもしばらく引き取る予定はない。自衛隊や民間の大型トラックがこうした廃棄物の運搬に当

たっていた。海岸近くでは電気も未復旧。信号はついておらず、場所によっては手信号で交通整理が行われていた。大きな被害を受けた接岸施設のすぐ目の前にあるウミネコで有名な蕪島神社は鳥居も社も無事。ウミネコも数百羽戻ってきていた。

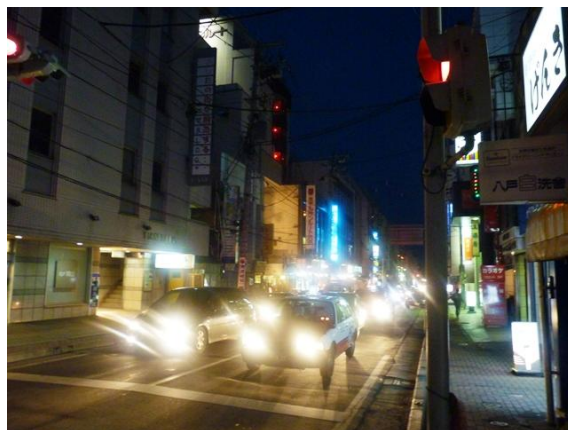
この海岸周辺の人たちはほとんど近くの公民館や中学校に設置された避難所に移動していて、最大で 69 ヶ所に 9257 人、現在も 44 ヶ所 2006 人が避難生活を続けている。それでも、この地域に義援金がまわってくる余裕はないかもしれない。避難所で生活している方の話では、家の立て替えに 300 万円、リフォームなら 100 万円が自治体から補助されるらしい。当然これで足りるわけがない。結局大胆な増税を含めた行政的な調整が行われず放置された場合、被災の度合いによる貧富の差の拡大が今後大きな社会問題となるだろう。

<被災地の範囲 一わずか 5 km の大きな違い一>

“被災地”とよく耳にするが、一体どこからどこまでが被災地に含まれるのだろうか。

青森県の中でも八戸市や三沢市の被害は大きい一方で、弘前市や青森市では自分たちが被災者だという感覚よりも被災者へ支援する側として意欲的な雰囲気が見られる。そういえばイラク戦争中も自衛隊が活動したサマワという場所は戦闘地域ではないとされていたのを思い出す。

八戸市に焦点を当てて見ると、港の方ではだいぶ大きな被害を受けてライフラインが今も復旧していない。その一方で、市街の中心地では地震による倒壊や津波の被害はほとんど見られず、ガソリン不足と節電の度合いも含め生活水準は現在の東京の生活とほとんど変わらない。被害の顕著な港と賑やかな繁華街の間隔はわずか数キロ程度。





市内で最も栄えている通りに三六横町という屋台村がある。被災当日の夜、ろうそくを立てて営業を続け、帰れなくなった人たちを受け入れていたお店もある。現在は人通りが 3 分の 1 程度に減ったものの、避難所で暮らす方の中にはここへ息抜きに一杯飲みに来る人もいる。一軒覗いてみると、そこには海岸近くの工場を経営している方や現在避難所で生活している方がいた。設備が浸水のため使用不能になっていたり、自宅のある地域のガス・電気がまだ復旧していないことで戻ることができなかつたり、漁船を失って従業員の漁師を解雇せざるをえないといったそれぞれの生活に応じた被害を時には真剣に、時には冗談交じりで話していた。

早くも 14 日にボランティア募集を受け入れ始めたこの街では、50 件の依頼に対して八戸市民だけで 300 人以上がボランティアに登録申請し、3 日もしないうちに供給量超過でボランティア募集を締め切った。この被害も過小に評価されるべきではないが、衣食住の問題でいえばやはり宮城や岩手のような地元だけでは明らかに手に負えない状況とはやや異なる。

被災の度合いによる貧富の差の拡大を少しでも抑えるためには、被災レベルごとの境界線を明確に認識しておく必要があると感じた。

<被災から 2 週間後の八戸の様子>



被災から 2 週間後の 24 日。この日が八戸滞在最終日。震災後初めてゴミの回収が行われることとなり、外にまとめてあった泥だらけの家具や瓦礫が回収されていった。八戸港には支援物資のプロパンガスが到着。蕪島からすぐ目の前の水族館マリエントも営業再開。少しずつ、復興の兆しが早くも見えてきたような気がした。

同日、自衛隊八戸駐屯地を訪問。瓦礫除去や物資運搬、駐屯地内の入浴所開放等、地元市民の生活を支えていた。ここの部隊も岩手や宮城の被災地へ応援に行っている。



自衛隊駐屯地からの帰り道、市場に寄り道。漁業が盛んな八戸では、海産物の仕入れはどうなるのだろうか。話を聞いてみると、現在この市場に並んでいる品物は冷凍してあった在庫とのこと。ちなみにいかの塩辛が八戸の特産品。福島県産の農作物も含め、食材調達の困難さが現実の問題となるまでに若干の時間差がある。この市場の仕入れ状況も、次週以降はどうなるかわからないとのことだった。



市場を出ると、まさかの吹雪。自転車行動だったのでだいぶ寒かった。少し走っただけで頭に雪が積もる。あまりの寒さにコンビニやガード下で休憩をはさみながら帰途についている途中、広場で小学生か中学生くらいの子も達が 10 人くらいでサッカーをしているのを発見。全く中止する気配はなかった。どこからどこまでが被災地で、いつからいつまでが被災時で、誰と誰が被災者なのかに関係なく、この街では日常らしい風景が戻り始めている。

文責：東 桂太